

第2章 「論理的な熱い心を持って 前進したい！」



村上 知也
東京支部城南支会

■相談者のプロフィール■



診断士になって3年目。もっと前に進みたい！
30代の男性独立診断士

■思い■

いつだって、ポジティブな心で、日々前に進みたい。そのために自己啓発本を読むけれど、あまりにも根拠のない気合ばかりの本が多くて嫌になる。その一方で、啓発本やロジカル本では、脳を取り扱った本がとても多い。人の熱意や論理がなぜ発生するのか、脳にさかのぼって確認してみたい。積極的な思いと首尾一貫したロジックのバランスがうまくとれれば、もっともっと前進できると思うのだ。

渡辺：脳の本って、流行っていますよね。
「左脳で考えると、ロジカルになれる」、
「右脳で考えると、ひらめきがわく」とか。

村上：私は生物工学が専攻だったので、読んでいて納得できない本も多いです。科学的分野のはずなのに、根拠や論理が抜け落ちた本が多いと思うんです。

渡辺：それで、「脳」の本の紹介が多いのね。

村上：そうです。「①脳って何だ？」という本を読んで人間の仕組みを把握し、その後「②論理的な思考」を再認識し、最後に「③前に進んでいく」といった心の動きも含めて、紹介していきます。

■■■■テーマ①脳を知る■■■■

村上：最初に紹介するのは、『①-1* 最新脳科学で読み解く脳のしくみ』。こんなにわかりやすい脳科学の本は、読んだことがありません。

渡辺：どうわかりやすいの？

村上：脳の俗説の検証を、科学的根拠と、読者が興味を持ちそうな事例で紹介してくれています。たとえば、記憶喪失を取り扱った映画は多いですよ。ハリウッドでは「メモメント」、「ボーン・アイデンティティ」、日本では「博士の愛した数式」などです。

渡辺：頭を打って一時的に記憶を失った主人公が、最後にまた頭を打って記憶を取り戻すとかって、よくありますよね。

村上：頭を打ち、脳の一部が損傷して記憶を失うことはあっても、もう一度頭を打ち、記憶を取り戻すことはありません。

渡辺：人の頭は、壊れたテレビではないと。

村上：ドラゴンボールでも、孫悟空は子どもの頃に頭を打ち、残虐なサイヤ人としての記憶や思考を失いました。でも、その後の戦いで何度も頭を打っても、戻らなかったですよ。

※①-1などの番号は、各章の最後にある書評の番号とリンクしています。

渡辺：脳科学としては、正しいわけですね（笑）。そのほかにも、「一夜漬けて効果があるの?」、「車のキーを忘れても、運転を忘れない理由」など、興味のあるテーマが科学的かつ論理的に紹介されていますね。

村上：同じような視点で、『①-2 脳科学の壁』も、ミラーな脳科学に苦言を呈しています。

渡辺：ゲームをやりすぎると無気力人間になるという「ゲーム脳」は、存在しないと。

村上：存在しないというより、「ゲーム脳」の根拠となるデータが存在しないといったほうが正しいです。脳科学の現時点での到達点や限界を示してくれています。

渡辺：次の『①-3 戦略脳を鍛える』って、脳科学の本じゃなくて、戦略の本ですね。

村上：そうです。戦略論が主題なんです。ただ、通常の戦略本はあくまで、競争に勝った企業についての研究結果であり、後づけ感は否めないですね。

渡辺：たしかに、戦略の理論に則って提案をしたら、どの提案も一緒になって、差別化できなくなってしまうですね。

村上：論理性が重要と思われる戦略分野に、ユニークさをいかに持ち込むか。論理的な左脳とヒラメキの右脳を、同時に活性化させることの重要性が説かれています。

渡辺：数多く掲載されている、戦略のミニ事例を考えているうちに、脳の新しい使い方ができるようになりそうですね。

■■■テーマ②論理的になる■■■

村上：脳の特徴や使い方を把握したら、次は論理性の発揮ですね。

渡辺：ロジカルシンキングの本って、やっぱり難しいイメージがありますよね。

村上：ロジックが通っている文章は、むしろ表現がシンプルで伝わりやすくなるはずですよ。ここでは、単に論理思考ではなく、「提案」と「議論」の2つの切り口で論理思考を取り上げた2冊を紹介します。

渡辺：『②-1 ロジカル・プレゼンテーション』は小説風の展開の中で、「提案」に必要な論理力を整理してくれています。

村上：目次がロジックツリーになっていると、全体像がつかめてわかりやすいですね。ほかのビジネス書の目次も、羅列ではなくツリー化されていればと思います。

渡辺：『②-2 ロジカル・ディスカッション』は、「議論」を論理的にファシリテートするのに必要な力を整理してくれています。

村上：本書の中でも、ファシリテーションの役割は「議論をまとめる」のではなく、「議論がまとまるようにする」ことだと言われています。議論の中身ではなく、ルールにも論理性をあてはめることが重要ですね。

渡辺：でも、『②-3 「原因」と「結果」の法則』は、論理というより自己啓発のための本ですよ？ それも、100年も前の。

村上：この本は、「私たちのこれまでの思いや行動が、いまの私たちを形づくった」という、ごくりふれた内容です。でも、極限までシンプルにされた文章が響きます。まさに究極の因果関係の本です。

渡辺：ロジカルシンキングでも、因果が明確なほど相手に伝わりやすいですもんね。人生を前に進めるには、自分の行動とその行動を生み出す思いが重要なんですね。

村上：「ただ純粋に強くなりたかった孫悟空が、死ぬほど修行をしたから、スーパーサイヤ人になれた！」といった関係ですね。

渡辺：また、ドラゴンボールですか（笑）。

■■■テーマ③前進する■■■

村上：頭の中がロジカルになってきたところで、前に進むのか、そこにとどまるのか、自分で選択していきたいですね。

渡辺：『③-1 選択の科学』では、選択することは生物の本能であり、自分の置かれた環境を自分で変える能力であるとしています。

村上：実験では、選択肢を多く与えられた生

物のほうが長生きするのですね。

渡辺：その一方で、「ジャムの法則」と言われる実験をしています。6種類と24種類のジャムの試食コーナーをつくってみたが、購入したのは、前者では試食した人のうち30%だったのに、後者では3%にすぎなかった。

村上：豊富な選択肢を顧客に提供することは、利益につながるわけではないですね。

渡辺：いずれにせよ、自分で「選択した」実感を得られることが大事なんでしょうね。

村上：選択することで、「ハズレを引いたなあ」、「失敗したなあ」と感じることもあると思います。そんなときは、『③-2 20歳のときに知っておきたかったこと』の教えを実践したいです。たとえ射た矢が外れても、「矢の周りに的を描く」ことができればいいのです。

渡辺：10人いれば、10通りの成功パターンがあるので、選択した的が初めから1個しかないなんてことはあり得ないですもんね。

村上：的が不明確、つまり将来が見えないことは、歓迎すべきことですよね。予想できる道を外れたとき、常識を疑ったときこそ、自分の可能性が広がるのですから。

渡辺：最後は、村上春樹さんのインタビュー集ですね。『③-3 夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』は、彼の小説が好きなお方にはたまりませんが、そうでない方に対しても、示唆的な内容が多いですね。

村上：村上春樹さんはマラソンが好きで有名です。ずっと走っていたいという思いがあり、ご自身の墓碑名に刻んで欲しい言葉は、「少なくとも最後まで歩かなかった」。われわれも、最後までずっと前進して、走り続けたいですね。

■本スケジュール 村上知也からのひと言■

診断士試験は、ロジカルな試験です。つまり、診断士にロジカルな思考が求められることは間違いありません。しかし、それだけではうまく問題を解決できないことが多いのが、現実ですね。

「ロジカルに思考する」、「前向きに行動する」思考と行動のいずれにも、脳が大きく影響していることは間違いありません。そこで今回は、脳に関する本を最初に紹介しました。と言っても、難解な学術書ではありません。現在までに解明されている脳の仕組みをある程度把握することで、さらにロジカルに考えたり、行動力を発揮して前進したりできるのではないのでしょうか。



東洋経済新報社

【①-1】『最新脳科学で読み解く脳のはしくみ』

サンドラ・アーモット、サム・ワン（著）、三橋智子（訳）（2009/4）

科学書でありながら、脳の逸話集のようなスタイル。気に入った章だけつまみ食いできるので、科学に詳しくなくても読み進められる。注目はP. 302終章の「最終的なアドバイスは脳を鍛えるソフトウェアを使うより、定期的に体を動かそう」。おっと、じゃあ、脳科学なんて無意味なんて思わないでほしい。まだまだ、理論的に証明されていないことが多いからかもしれないのだ。この結論が変わる日がくるのかも。



講談社α新書

【①-2】『脳科学の壁』 榎原洋一（著）（2009/1）

現代の脳科学がどこまで到達しているのか、親切丁寧に説明してくれる。「なぜ」というのがヒトの証明であり、考えることをやめたときに、ヒトでなくなるのかもしれない。注目はP. 86。前頭葉ブームで、脳トレなどがもてはやされているが、ほとんどの事例は研究データとして根拠がある状態とは言えない。効果があるかもしれないが、証明されたわけではないのである。脳はいまだに神秘の世界である。

 東洋経済新報社	<p>【①-3】『戦略脳を鍛える～BCG 流戦略発想の技術』 御立尚資（著）（2003/11）</p> <p>「考え方を学べる本にしたい」。あとがきにこう、著者の思いが示されているが、その思いは実現されていると思う。企業がケンカに勝つために必要な戦略と実行力について教えてくれる。注目はP. 18。NASAが火星探査を提言するも、財政赤字のアメリカ議会は必要予算の3分の1しか承認しなかった。NASAは3分の1で実現できるユニークな案を、どのようにして考えたのか。</p>
 英治出版	<p>【②-1】『ロジカル・プレゼンテーション』 高田貴久（著）（2004/2）</p> <p>なぜ、「提案」がうまく通らないのか。営業を経験された方は、常を感じるのだと思う。しかし営業だけではなく、日常の仕事は「提案」の連続のはずだ。「提案」には、「考える」＋「伝える」の両方の能力が必要。どちらかが欠けていれば、通るものも通らない。注目はP. 296。本書内の提案小説が、「提案の成功」を迎える。</p>
 日本経済新聞出版社	<p>【②-2】『ロジカル・ディスカッション～チーム思考の整理術』 堀 公俊/加藤 彰（著）（2009/12）</p> <p>注目はP. 212。現実の社会は限定合理性の世界で、ロジックだけでは現場が動かないのは、皆が感じるところ。ロジカル・ディスカッションはあくまで手段であって、目的ではない。ロジカルがベースであるべきだとは思うけれど、厳密な論理性を求めると、つじつまが合わないところも出てくる。「論理に溺れず、直感に逃げず」。</p>
 サンマーク出版	<p>【②-3】『「原因」と「結果」の法則』 ジェームズ・アレン（著）、坂本貢一（訳）（2003/4）</p> <p>原因と結果、それは因果関係。INPUTがあって、OUTPUTがある。そうすると、「心の中の思いが私たちを創っている。私たちは自分の思いによって創り上げられている」となる。OUTPUTを変えるには、INPUTを変えるしかない。結果を変えるには、原因を変えるしかない。そうすると、やるべきことは自分を変えることしかない。</p>
 文藝春秋	<p>【③-1】『選択の科学』 シーナ・アイエンガー（著）、櫻井祐子（訳）（2010/11）</p> <p>シーク教徒の家庭で生まれた盲目の助教授。宗教や障害により、選択する前に選択の幅を狭められたことが、彼女を選択の研究に誘ったのか。選択できることが生きる活力を生む一方で、多くの選択肢は悩みを生む。選択自体が、人生を切り拓く力になるのである。注目はP. 226。品揃えが豊富すぎると、逆に売上が下がる。</p>
 阪急コミュニケーションズ	<p>【③-2】『20歳のときに知っておきたかったこと スタンフォード大学集中講義』 ティナ・シーリグ（著）、高遠裕子（訳）（2010/3）</p> <p>20歳のときだけでなく、30歳でも、そしていまも絶えず、思い出さなければいけないこと。ついつい、自分には独創性がないと思い、異質な方法がとれない。これを打ち破って前進するには、どうすればよいか。注目はP. 210の、クリエイティブ・ライティングの例題。身の回りで見ると、どのように行動するかは、自分にかかっている。</p>
 文藝春秋	<p>【③-3】『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』 村上春樹（著）（2010/9）</p> <p>村上春樹のインタビュー集。なぜ、彼は書くのか、そして書けるのか。創作の秘密をかいま見れる。仕事をする人がなぜ、毎朝起きて仕事に行けるのか、そして続けられるのか。小説の執筆であれ、オフィス作業であれ、力作業であれ、根源は同じなのだと思う。注目はP. 524。12ページにも及ぶ、渾身のあとがきだ。</p>